



共有すべき事例

疑義照会・処方医への情報提供

患者に不適切な剤形（吸入薬）



事例

【事例の詳細】

インフルエンザウイルス感染症と診断された7歳の患者に、イナビル吸入粉末剤20mgが処方された。吸入確認用の笛を用いて適切に吸入できるか確認を行ったところ、患者はうまく吸入できなかった。薬剤師は患者家族に、吸入薬では薬剤の効果を得られない可能性があることを説明し、内服薬への変更を提案したところ、了承を得た。処方医に疑義照会を行い、内服薬への変更を提案した結果、タミフルドライシロップ3%へ変更となった。

【推定される要因】

診察時に、患者家族が、1回の吸入で治療が完了するイナビル吸入粉末剤20mgを希望した際、処方医は、患者本人が吸入可能であるか確認しなかったと考えられる。

【薬局での取り組み】

小児にイナビル吸入粉末剤20mgを交付する際、患者が吸入することができるか確認する。



その他の情報

イナビル吸入粉末剤20mgの添付文書 2024年10月改訂（第2版）（一部抜粋）

9.特定の背景を有する患者に関する注意

9.7 小児等

9.7.1 本剤を適切に吸入投与できると判断された場合にのみ投与すること。

14.適用上の注意

14.2 薬剤交付時の注意

14.2.1 患者又は保護者には添付の使用説明書を渡し、空の容器によるデモンストレーションも含めて使用方法を指導すること。



事例のポイント

- 本事例は、小児の患者にイナビル吸入粉末剤20mgが処方された際、薬剤師が、吸入確認用の笛を用いて患者が吸入できるか確認し、吸入薬の使用は難しいと判断したため、内服薬への変更を処方医に提案した事例である。
- イナビル吸入粉末剤20mgが初めて処方された患者には、吸入方法を指導し、正しく吸入できるかを確認する必要がある。患者が吸入できるか確認する際は、製薬企業が提供している吸入確認用の笛などを活用することが有用である。
- 吸入薬の他にも、医療技術の進展により、さまざまな特徴を持つ外用薬が次々と発売されている。薬剤師は、患者が処方された薬剤を使用できるか見極め、使用が困難な場合は、薬剤の変更を提案することも重要である。

